国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

特1
2961

九月部目録

○養生の法　○雨風の考　○米の豊凶
○妙薬　○季とする祭事外人家
重宝のこゝハ処々ゑ数多ある
ゆゑ目録ゑらんとするこゝ

九月

卦　月支　調子
陰陽生　異名並註　九　初丁

△寒露節　九　二丁
△指降中　九　三丁

日令

此部ハ九月日の定つくるゝ支の定つくるゝ

○拾　九　三丁

△御香宮祭　九　四丁
△鞍馬祭　九　四丁
四京花野井並神輿　九　四丁
△木幡祭　九　五丁
五日　△醍醐祭　九　五丁
△桂宮相撲　九　五丁
八日
△重陽節　九　△菊節
△重陽宴　△菊の酒　九　六丁
△菊花宴
△菊酒　△菜萸翁　九　六丁
△栗の節句　九　六丁
△菊天
△菜節
△醍醐雪祭　九　五丁
△不堪田養　九　五丁
七日

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

九日
△菊の着綿 七丁
△菊花宴 八丁
△後の鶏 九丁
△貴船祭 九丁
△佩茱萸 八丁
△酒 八丁
△京醍醐祭 九丁
△鹿谷天王祭 九丁
△一宮祭 十丁
△生玉祭 九丁
△九日小袖 十丁
△小重陽 十丁
△近江四宮祭 十丁
△下鳥羽祭 十丁
△五條天神祭 十丁
△例幣 十丁
△御難餅 十丁
△太秦牛祭 十二丁
△後名月 十二丁
△後の月 △豆名月 △栗名月
△二夜月 △名残月 △十三夜
△住吉相撲會 △宝の市 △外の市 十三丁
△白川祭 十三丁
△天王寺 奉會 十三丁
△都岩倉祭 十三丁
△天王寺念佛会 十五丁

十月
△粟田口祭 十四丁
△小倉祭 十四丁
△神田祭 十四丁
△岡崎祭 十四丁
△桂川御祓 十五丁
△度會新嘗會 十四丁
△野の宮別 十五丁
△摂津穴綾祭 十五丁
△摂津呉服祭 十六丁
△城城南神祭 十六丁
△婆利女祭 十六丁
△旅夷祭 十七丁
△八幡花頭 十七丁
△上難波祭 十七丁
△淀祭 十七丁
△座广祭 十八丁
△逆神祭 十八丁
△天満流鏑馬 十八丁
△北山祭 十八丁
△津村祭 十八丁
△鳴滝祭 △福を神祭 十八丁
△住吉神送 十九丁
△周防山口祭 十九丁
△伊勢御遷宮 十九丁
△番船 △錦番 △早綿 十九丁

月令
此部ハ八日の定らざる九月一ケ月のくばあつめしるす

△落水 九ノ十一
△海嬴廻 九ノ十一
△新綿 九ノ十一

時令

此部ハ九月の時節の物ハ
つゝらゝし霜るゝのこと迄出ス

△暮の秋 △秋澄 △冬ゝる 九ノ十一
△冬と隣 △冬と隣の外詞多し
△九月尽 九ノ十二
△野山錦 △山紅葉 九ノ十二
△秋霜 九ノ十二
△露霜 九ノ十二
△露時雨 九ノ十二
△露寒 九ノ十二

草木

此部ハ九月一ヶ月の草
木の類をあつらへしこと

△菊 △白菊 黄菊等菊品類かづくあり 九ノ十二
△菊花香 九ノ十二
△菊合 九ノ十二
△地榆花 九ノ十二
○川芎花 九ノ十二
○黄芩花 九ノ十二
○岩菊花 九ノ十二
△蘆穂絮 九ノ十二
△薄散 九ノ十二
△椿の実 九ノ十二
○橘の実 九ノ十二
△密柑 九ノ十二
△柑子 九ノ十二
△九年母 九ノ十二
△金柑 九ノ十二
△温州橘 九ノ十二
△佛手柑 九ノ十二
△糧持 九ノ十二
△南天燭子 九ノ十二
△闇子桐実 九ノ十二
△皂角子 九ノ十二
△木欒子 九ノ十二
△菩提樹 九ノ十二
△川楝子 九ノ十二
△桐油の実 九ノ十二
△椋実 九ノ十二
△槙榴実 九ノ十二
△栩実 九ノ十二
△老母草実 九ノ十二
△栗子 九ノ十二
△毬栗 九ノ十二
△落栗 九ノ十二
△栫栗 九ノ十二
△茅栗 九ノ十二
△栗子餅 九ノ十二
△錐栗 九ノ十二
△三度栗 九ノ十二
△榛子 九ノ十二
△櫟子 九ノ十二

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

△椎　九ノ三十
△椎柴　九ノ三十
△椎の葉△椎の小枝△出ていまつ
△團栗　九ノ三十丁
△新胡桃　九ノ三十一
△新榧子　九ノ三十一
△新松子　九ノ四十一
△水木子　九ノ四十一
△菜黄　九ノ四十一
△飄樹　九ノ四十一
△榎実　九ノ五十一
△孰柳　九ノ五十一
△無果花　九ノ五十一
△鶯上戸　九ノ五十一
△仙蓼　九ノ五十一
△晩稲　九ノ五十一
△漆子　九ノ五十一
△紅葉△種もいろ〳〵あり　九ノ五十一
△色付く松　九ノ八十一
△破芭蕉　九ノ九十一
△千土生　九ノ九十一
△ゝゝ粘　九ノ九十一
△緑豆引　九ノ九十一
△蕎麥刈　九ノ四十一
△牡丹　九ノ四十一
△佛甲草　九ノ四十一
△小蓮花　九ノ四十一
△蒲萄花　九ノ四十一
△櫧實　九ノ四十一
△梅嫌　九ノ四十一
○牡木ゝ以光ニ用意　九ノ四十一

生類

此部ふい九月一ヶ月もろ〳〵の生ものとあつえしるを

△尾越鴨　九ノ四十一
△熊栗棚かく　九ノ四十一
△霜踏鹿　九ノ四十一
△紅葉鮒　九ノ四十一
△射祭獣　九ノ四十一
△爵父永為蛤　九ノ四十一
△細代打　九ノ四十一

必用

此部ふい風雨の占○破軍のむかう方○日ごろのよい地位行の心得○作事のよい地○養生○衣服の式○生花の式○料理うん立の法食物の式○地等其外品々あつむ尤日乃定ゆゑ〳〵ゝ口の日令の部ふあり此部ふい日のそだつさる二月一ヶ月要用の事とあつえしるを

△紅葉衣　九ノ三十

九月目録終

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

九月之部

△印付るハ世界能諸季寄出て用ゆる景物へ

九月

生五陰

剥ハ群陰陽と剥尽す月なり仍て草木花葉枯凋して枝幹凋て剥落する

無射ハ陰気外陽気降て萬物陽気に隨ひて出て貪るこゝなくべし虫魚の類蟄伏し草木根に帰り潛むこゝを射こゝを仍て無射と云

異名

△李秋 礼記 暮秋 曾青来珍 晩秋 韻府

△梢秋 四時纂要

△無射 礼記 寒露 韻府 △玄月 事物異名

△素秋 韻府 菊秋 事物異名

和名

△紅樹月 △菊月 △菊開月 △寝覚月 △紅葉月

△木染月 △小田刈月 △梢の秋

△長月 これハ能ハ八月なれども九月可なり八月の日ハ長ゆ

異名註

△季秋は季の末の秋のまをゝと云ことく　○暮秋といふ秋の暮るゝ年の暮るゝなるゝして夕の暮にていふ　末秋も名の秋なり　△梢秋は梢いろゝ名にて諸木紅葉し梢いろぢくゆゑ梢秋といふと李吟いへり　△晩秋は暮秋と同し晩の秋といふ事なり　△無射は上おなしく　△寒露は節の名なり

△玄月といふ玄はクロシと訓黒き純陰の色なりとして玄月と云　△素秋といふ素は白し秋乃金気のなるさる処金の本色白なれゝなり　○菊秋といふ當月は菊花乃咲出る月ゆへなり　菊開月といふも同しゝなり

(家)藏玉　寝覚月　家隆

いく秋の有なし枕の長さあり月ゆへ寝ぬ夜ゝ秋とゝ

秘藏　彩月

月の錦ふかいろゝ月ふかき色ハ

あしらふ秋さ山ゝ

莫傳　菊開月

あしと美ハ菊の花の開ける

葉さえ月ハ秋ゝ

靈玉集　梢の秋　木末の秋　実隆

名は秋て梢の秋ハ月の

ゝ秋ハ月ゝ

莫傳　紅葉月

月ハ秋ふ月ハ　○の紅葉ハ

ゝ月ふ月て

新古今　長月　花山院

秋の秋ハ長月ふ月

ゝ月ハ

藏玉　小田刈月

さハ時ゝ月の

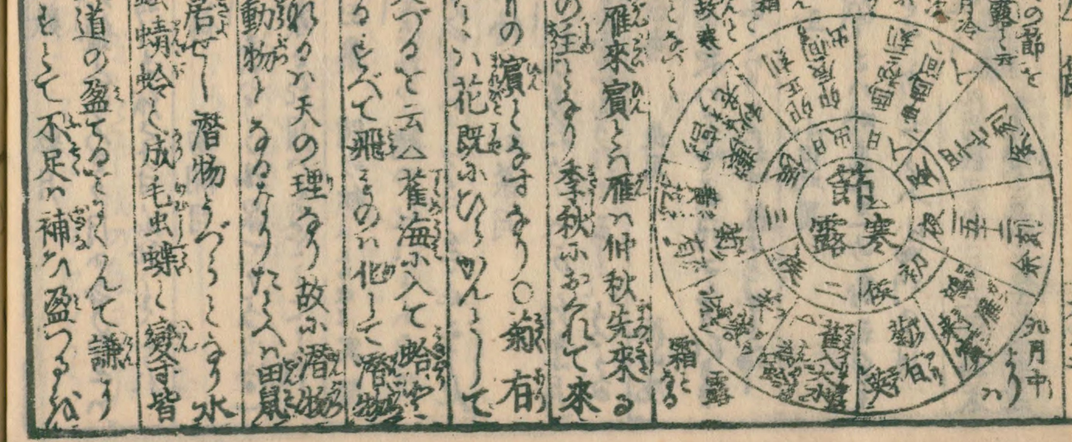
ゝて　小田刈の月

寒露　九月節の名○七十二候○禮本七十二候○月令廣義

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

九月の節を寒露と云

此月冷寒ふ



露凝て霜となる故寒露と云

鴻雁来賓と云雁は仲秋先来るものなり季秋ふたたび来るものの賓客なり○菊有黄華と云菊は既ふかし盛んなり

英づると云△雀海ふ入て蛤となる○蟄虫坏戸と云蟄物又動物なり天の理なり故ふ蟄物穴居せり○蟄物とは水虫蜻蛉なり成毛虫蝶なり皆天道の盈てるとくんて謙なり益をもて不足を補ふ盈つるを減と故ふ飛ぶ物は潜む所謂知斯

○芙蓉冷しと云荷葉枯て破れて倒て様物凄く冷し

○菊有黄花と云菊は既ふ盛んなり開くとなり黄色の菊の本色なり○漢宮の漢の代の宮女の物なりとしてひそかに居るふたりくて秋ふるまるふるまるひて婦女かごのうのふ頃ふなるこころをいふなり

節天氣占候

此月己午の方より雲出る必風ふくし北西の風ふ久しく吹くとは風の後ふ雨ふること此月のうせし○十日十九日十七日必風雨のある日ふ雷ふれ米貴し虹の霓の傳説五穀ふたゝび月蝕あれば年あれて凶年なり

霜降

昼出夜入○七十二候○昼夜の長短左ふ記す

節氣十六日目霜降

軍星 戊指

露結て霜となるゆゑ霜降

中 霜降

△豺は山犬なり云狼に尤性あるなり○獺は魚を獺祭す○鹿鬼の類と雖も天と祭る○菱は菱の浮葉なり荷は蓮の葉なり○草木黄落は諸木枯て羅の如くなる故なり化とは枯て紅葉し千草黄ばみ枯て云なり○橙は橘の類なり橘はみかんに此類なる蚤なり○蟄虫咸俯は蚯蚓蛇蝮蝎なり○蟄虫咸地に俯とは蛇蝮蝎なり自然藉頭なり

乳とは実の入る事乳のごとくなるやうなれいなり

日令

九月の日は定つて支の定まるなり此部略

朔日 不見 ○今日雨風のはしり 麥價昇

就日 ○風霜を飛ぶは人民擾

祫

今日より八日まで着す九月より綿入なり夏は四月朔日より五月四日まで祫と着と諸社家の式なり毛詩国風豳風 草物は近来の物

(狂)ひつぢの草は若草のはいはせてきくのる我を 雪月

朔日 伏見御香宮 今月出 山城国伏見なり

名御諸神社の神功皇后を祭るなり今日御旅所へ神輿御出ありて九日まで御出中御旅所は大亀谷の東にあり御香と称ふ是文禄年中遷座あり外なり祭の當日九月

朔日 京都 鞍馬祭 今日出 神輿渡 祭礼見 御今日

御旅所へ御出九日まで有り 鞍馬明神と云。大己貴尊と云まうす

朔日 大坂 ○天王寺 金堂 安置 ○宮嶋 今 舎利講 刻音楽 日市あり

南都 ○氷室祭。南都四十四社神人 祭礼春日伶人 舞楽あり 大饗

○春日若宮御編棟の式 今日 若宮御旅所へ常住 今年 假社 造

二日 ○今日晴れ来年春雨 ○今日房事を慎べし

南都 ○東大寺鎮守八幡祭 此祭 久しく退転せず 京都天明

火災の後故有て再興せり 今年日ふ復して厳重なり

三日 ○北斗ふ神燈と奉らるる清の 真世

(子) 年中行司

京都 ○大通寺六孫王御出 ○多 音堂水仕 ○山城国まつり

四日 京 ○北野半蓮神輿 ○北野天 都 神祭八月なれども今年絶

今日氏地まつり 半蓮御輿と菓 菓とりて神輿と造る 渡御のまつりと名

五日 山城 醍醐祭 御出今日 ○萱尾明神祭。醍醐のまつる

みな野ふあり

木幡祭 木幡大明神と号く 天忍 骨尊と宇治郡木幡の里有

六日 京都 ○高臺院殿忌。大閤秀吉公の 政所人高臺寺 方々にて 讃法あり

七日 不堪田奏 昔は諸国の田の 亡あるる所々の目録

を奏して奉るそれかつさて 租税と免

しのやしあり。作るふかくざる田と

心えて不堪田と云なり 年中行司

(子) 秋はる町のそ 風雅

そこへてはくこふそくの坪付もあり

能 西北の方一の丈や不遠西 横手

京 ○久世祭○久世の神社久世郡書田村の氏神と今西の園久世村祭

都 万葉 やはらの久世の社の姫ごそうを

江 ○中郷祭又飛神祭とも云○祭神春日男か太玉命と合そ五社明神

遠

上 卯 占候 北風東風吹けハ来年三月七月米價貴し

八日 桂宮相撲 六条北西洞院西 桂宮邸

京 ○泉涌寺舎利會○湛海と云

都 僧嘉禎年宋より持ち帰り舎利と云り此日音楽あり泉涌寺に台密禅律の四宗あり

○玉水祭○山城国井手の郷玉水乃里なり

江 ○勾當内侍祭○堅田の浦か塚あり

州 夜祭と内侍か新田義貞の妻と

醍醐霄祭 今夜社前を飯三番あり霄宮飯と云

九日 不成就日 重陽節

△重九 △菊天 △菊節 △栗の節句へ栗ごと

昔ハ天子南殿か出御あり て今日

節會行ひ韻を探つて文を作り

文墨か居て講せらる委しくハ年報源

今日を重陽といハ九ハ老陽の

数なり九一ハ陽重るゆへ重陽

と云なり ○重九といハ九九重る

故聲か應して名づく ○一説に

重九といハ是ハ俗か長久といハ

同音なれハ祝ふなり

菊花宴 △重陽の宴 △菊酒

△菊瓶 △茱萸袋

今日群臣か菊酒を飲へくなり

茱萸の袋と身か佩び又ハ茱萸

の実の付る枝を折て頭かざ

ハ悪氣を去ると云是三郡次か故実有

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

重陽の事 并ニ菊花酒造ル法 故
支詩等委シク 日本歳時記ニ
出テ見ル可シ

(連)二巳端午 七夕重陽ハ昔ヨリ
祝ヘリ 右四節ハ陽の日陽の
日ナリ 是陽ヲ貴ビ陰ヲ賤ム
意ナリ 又上巳の粉餅 端五の粽
長陽の菊酒 又栗等 其節の物
故是ヲ食ヒ又ハ送ル事ナリ
其日の佳節ヲ祝スルなり

(発)年中行事 内大臣 草木子出ス

ながく紀ぶれば日ごとにそなへて
久しきなるべき酒のさかづき

玉葉 新院典侍

紀ぶるの秋ぞ久しき九重に
ながきをめぐるきくのさかづき

風雅 慈鎮

ながらへばあまたびきくの菊とれば
ちよのしるしあるかげかな

(詞)久しのちきく。菊なり。

月の久しき。久しとなり。
さきく。ながらへと久しかり。

(連)竹の葉に波そよぐ風の音
(俳)かりけのうるさきを世や菊の花 其角

義山 小そでも菊の葉を考
ひけ 庵の時やくすりぐさ 公

(狂)いかにへの菊の酒
久しき九重のいとひ 牡丹 正定

菊の着綿

枕草子に九月九日
の菊を綿とすと
の綿ふくめて参らせ給へる
此日の式を調ぶるなり 前日まで花
ふ綿とりかさねて風霜と隔てる
り 此日菊の開きたるを
綿と菊の大きなるを
ばかりておくるなり
今も猶大内よりの菊
宮女れ手ぞさしと
なるなり

(俳)長綿や紫ふ綿ぬと大笑 道古

(弓)かけ置ー茱の綿ーそのくへも
おりていくさを奏めれいう　相模

九日
茱萸　佩萸

此日茱萸ヲ佩ビ
菊花酒ヲ呑ムー
八豊八長房ガ桓景ニ災アサクル林ヲ教
タル故事ヲ由来トス此事甚論アリ
委シク日本歳時記ニ弁明ス

○唐土ハ今も今日山ノボリて菊花酒を呑み婦人茱萸の
佩をあらう　事文類聚ニ出ル

菊花宴

周ノ穆王ノ愛童ヲ
慈童ト云ヒ罪ヲ
蒙ムリテ酈縣山ニ謫サレタリ此
山谷ニ菊花充満セリ慈童常
ニコノ菊ノ滴リヲ呑シガ終ニハ
百餘歳ノ壽ヲ保チ魏ノ文帝
ノ世ニ出テ彭祖ト名ヲカヘ文帝
ニ此術ヲ授ケ奉リシカバ文帝コレ
ヲ受テ百年ノ壽ヲタモチ玉ヘリ
斯ル例ニヨツテ今日菊花ヲ酒ニ
ヒタシテ用ユレバ壽ヲ一ヘト云傳ヘ
タリ委シクハ日本歳時記ニ出タリ

(詩)重陽五字對句　同上

棒筐萸香遍　臨風孟嘉帽
稱觴菊花濃　乘興李舊舟

(詩)全七字對句　詩礎

今日暫同芳菊飲　献酬杯
明朝應作新蓬飛　客中愁

(詩)重陽之詞　崔国輔

秋葉風吹黄颯々　雁ノ来ハ二カヘガフケバキバンダ色デ
サラく晴雲日照白鱗々　ソラノハレタル中ニ白
雲カアルソレヲ日ガテラセバ
シロイイロガキラくトミル　歸來得問茱
萸女　山カラカヘツテ來タ茱萸　今日登
高醉幾人　今日ヤマヘノボツタヒトヲ
イクタリホド酒ニヨハシタソ

(状)九月節句之尺牘

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

重九鄭重々黄花馥郁偶有
送壺酒客敬待公之曳藜於
義間催風月興趣連々玉韻詞々

重九 佳節○九日○登高日 山へ登る九月

○萸節○九々良日○黄花佳期 九月九日ノメデタキ日ノ事

鄭重 至祝○嘉幸○致歓〻 メデタクシアワス

○申悦 送壺酒 贈孤樽○以

酒甕 曳藜 寄駕於蝸庐

○来叩蓬戸 風月興趣 尋芳

玩景○寄趣烟霞 連々玉韻 月上

自作口頭吟○五七言之芳韻 ヨゴン、シチゴンノオサク

九日 わくめ酒 今日よろん式事の酒もくくめて用よ

世諺問答ハ出くろ○抑元旦の屠蘇酒と用いくろ桃花菖蒲の酒きそ式正ハ冷酒なり食物本草にも酒ハ冷飲ハ宜しくして冷酒のみと用ゆと貴ハ

(俳)あくくろくなくハ酒のみくもろ 雪水

九日 後雛 雛のこくハ三月の部ハ委〻く出せり

(俳)角力とり所ふてハ多ふ雛なる 鼠

月と月の中ハ出るや坂乃ひかり 沾屋

(狂)出ちに寒くこゝふ入とくと秋風ハ出る後のひなう邪 良柳

九京 都醍醐 祭下醍醐長尾天満宮郷中の氏神くん

○上ハ出ていと清滝権現ハ護法神くもふ今日神輿と渡そ下れくど天神の社頭ハ能あり 笠取山の山上山下に鎮座ます

(秀)雨そそぐ高砂七宝の滝の水の音 慈鎮

九日 貴船祭 祭神二座高龍。奥御前 當社ハ龍

△德の無跡ふーて雨を祈て雨を止むる事を祈る御神なり

(秀)新古今 われは田のうるほひそうはそそぐ井せゐのそらるはよの神 賀茂重平

九日 鹿谷天王祭 ○淨土寺村十禪師

△祭昔ハ九四日なれども今ハ九日なり京銀閣寺門前ハ十禪寺社なり

○中村祭。長谷の内なり夜ハ入行ゝ故俗ゝ盗人なりとゝ

九日 大坂生玉祭 祭神活玉神ゝ今日流鏑馬等あり

九日 河内宮祭 平岡神社と云祭 紀州春日同神ゝ

○科長神社。祭ハ六月八月九月九日ゝ山田村東條ゝあり延喜式出肥○長嵜諏訪明神祭。傘鉾前踊等あり甚ゝ色十日ハ鹿解

ゝて九日ハ供ゝ鹿を殺て各鉾殿ふて鹿を看ゝて酒を呑ゝ

播○明石大倉谷稲爪神社祭

磨祭日ハ三人牛ハ乘ゝて社頭ゝ

参る例式あり ゆゝ牛来祭

ゝもつゝなり

九日 天氣 九日ハ晴ゝ生る雨降ゝ少ゝ晴ゝれハ冬至並

來年元日両日晴天ゝて冬中ハ雨も少ゝ若雨降ハ月中降ゝ若降ゝれハ豊年の兆なり ○終日東北の風ゝて豊年ゝ西北の風ハ來年凶

九日小袖 御湯殿記日九月節句ゝ云禁ゝ云ト今日ゝ縹色小袖を着ゝ小袖ゝ

ゝハ綿入ゝ

十月 十日菊 △後日菊 △節後菊 △残る菊 ○残芳

菊ハ九日の佳節ニ用ゆる物なるに
ハ九日ニ十日ニ用ゆるこゝろ禁中
残菊宴あり

(万) 千載　基俊

ながらへて九ちまたの菊ぞ見る　昨日
今日とのこゝろ

(連) かりそめに九ちまたの菊ぞ見る　昨日
今日とのこゝろ

(能) 九日の菊ハ十日の酒ハ高砂の尉　其角

(荘) 九日の菊ハ十日の酒ハ　筑里

(詩) 十月菊五字題句　詩題

陽遷陶公與　蜂猶探十日殘芳
二月二千歩

養英　梵公詞　蝶尚在日下黄昏
菊ノ花ノ花ノ花

(注)冠の礼とたゝしてのさくとめさせる勅使なり　百二

十一日　京　○六孫王権現祭。八條北大通寺ふかく六孫王經基公と祭る

十二日　都　△御難餅　○日蓮上人七字の題目とゝなへ一流の宗門と立て安国論と著はして諸宗とそしる故ふ平の時頼怒て伊豆ふ流す三年すして免されて鎌倉ふ帰て尚諸宗と誹るふよりて弟子くとりふ土の牢ふ入る文永八年九月十二日鎌倉龍の口といふ處ふて首と刎んとす時頼の子ときと憐て死罪とゆるさめ佐渡の国ふ流す其後大赦ありて帰る上人遷化の後弟子の僧竜の口ふ寺と建るこれを龍口寺といふ今日参詣多し像の前ふ餐と供ふ今日難ふあひたる日ゆへ今日をもつて餅を御難餅といふなり

十二日　京　○太秦廣隆寺　○太秦牛祭　いふ桂宮院

十三日　都　内ふ伽藍神あり大酒神と云聖徳太子川勝ふあふやて建る処く摩多羅神と祭る日あり上宮王院の庭ふ於て紙の衣と着て牛ふ乗て高声ふ祭文とよむ此祭文甚詩ふ乗くい追て補遺ふ〻す

(雅)ゆへ恐いよりて流して牛乗ふ素堂牛ふ乗やの雪つゝ皆つゝ　桃隣

十二日　大　○多武峯祭　○田身嶺　和本殿の中央ふ大織冠鎌足公入

十三日　今日晴ふれは晴久しつゝて残る綿ところ〻○雨降ふ冬雨雪ふ

△後名月　△後の月　△豆名月　△栗名月　△二夜月　△名残月

△十三夜　○此夜の月と賞とる事寛平法皇より始まり保延元年九月十三夜ふ雲いさぎよく月明かへ明月無双のよう仰

出されしより今日と明月と
ふ中右記ニ出　鳥羽天皇保安二
年ニ関白忠道公九月十三夜の月
を賞し給ふ詩あり歳時記ニ出
○五雑組曰上巳有風梨有蠶中
秋無月蜂無胎九月十三夜晴るい
釘熨斗断縄いろり其外説多
日本歳時記ニ委しく其外説多
○民俗今夜豆と少ぐ餅交栗
とも食を撰択委しく歳時記拾遺
ニ書ニ出さり百合さこなり

(三)　續後拾遺　二夜月

そとしくく私のまれそそ多ゑ
ことひもつりとれるいみされそ

草廬集　頓阿

あるくけさ代のそめの秋うや
月も糸おくこいあるらん

(連)　あるる秋ふ月の二夜は宗碩

(俳)　本考(撰)　ふ後の月
後ひ月ふ木の間ふたそうは月の月　蘭
ふを合て豆の花も秋ふや　麋貫

拾遺ふ月ふ月の秋つきい
ニつちくひのとくく　草月　金波

(狂)　名月ふ月ふ月の秋つきい

(詩)　九月十三夜詞　林春信

李秋逢遇十三天　来ノ秋ノ中デコヨヒ十三夜ノ空ニ
月ヲミルトキ明月無雲自粲然ノ明
月ニ雲ノ外ハリモナクテ
オボロカラ光リガアキラカナ
今夜似星殘粲
色　コヨヒ星ノヤウニミエル
蟾光相映一攝
殘キクノイロヲミレハ
前月ノ光リニハヘテラシカシ
ミヘニキクトスル

十三日　大坂住吉相撲會　△宝の市。
△外の市
今日神輿堺の宿院へ渡御
相撲十三番ある故ふ
會くいふ今日社頭ふ外ふ
商ふ是と宝の市といふ市笑姿
の神あり諸国市の始めくん
(俳)　祇園ふて分別ふる月えそ芭蕉

(雅)年老ー松ノ花のにほふこそ　これてそ人の宮ゐりくり　貞柳

十三日　京都白川祭　祭神天滿宮白川相南の方に有処の生土神なり

十四日　大坂天王寺一乗會　昔ハ今日修行ゆゑ今ハ逆なりしを中世より十五日大念佛會と行なひしし

十五日　大坂天王寺念佛會　今日未ノ刻六時堂そ修行なと太子の鳴鼓と六時堂ふるひ奉ると舞樂あり當まれて盛樂會聖灵會今日の念佛會ともと三大會といひて最重の法會なり俗ふ柳祭なと

○三津八幡祭○玉造稲荷祭

十五日　京都岩倉祭　北山の岩倉山なり祭神十二座なり北岩倉大雲寺の鎮守なん昔ハ王城の四隅ふ岩倉ありて社を

れて帝都の守護なり是ハ其一なり祭礼夜ふ入神供と奉る

十五日　京都粟田祭　午頭天王と祭る鉾十七本あり昼ハ粟田御殿ふ入り夜ハ白川橋と越て知恩院さんの細き坂橋と渡るとれ上ると鉾の曲特あり甚面白きことしきて

十五日　江戸神田祭　天平二年ふ大己貴命と鎮座往古ハ神田と国々ふ大神宮へ初穂と納むり御田あり大己貴命ハ五穀の神なれハ右神田ふハ此神と祭るへ其後延文の頃より將門の靈と本殿のかくれに祭りて今二座と祭りハ隔年ゑと子寅辰午申戌ふ山王祭と此祭と江戸の大祭なり

(俳)こんにちは　秋の日の弥田　弥系　李々

十五日　豊前小倉祭　祭神三座ふ應神天皇ふ神功皇后ふ玉

仮殿あり十四日神輿かり殿ふ渡御
やぶさめあり夜分祓あり十五日祭え

十六日　山城岡崎祭　東天王の社〜云西天王の社ハ吉田山の麓ニ有鉾七本あり神輿ふ先達ていく是と鉾ともろ〜〜
其内一本の鉾鉄ばの上ふ土ゑて
つくり大鷹とゆく名ゆゑ大鷹の鉾とつて神宝寺雍州府志出
一書ハ祭ハ九月十五日へしつゝ

○伏見三洲祭。天武天皇と祭
ゑ又午頭天王ともいつゝ十二日ハ御出え

○岩屋明神祭。神体宮道祖
神ゑ山科大宅村の東ふあり

十六日　虔會新嘗會。神嘗祭
あり今日伊勢外宮へ天子より新米の初
穂と供ふ虔會ハ伊勢外
宮鎮座の處の名あり内裏新
嘗會と同〜〜〜俗ふ御祭

と称ス明十七日内宮ふあり事
実外宮と同〜事あり

(朋)そもそも名かはしやあり嘗奇風
邪ハ来ふ洗ひろふ也の文かすあ東四

十六日　江戸日吉祭　十日より廿一
日迄ゑ祭礼の間甚賑ハ〜

寛仁二年九月十六日此處ふ鎮座
あり生姜の市あり祭詣の人
薬生姜と求めあり家毎ふ鹹漬
の中へ入漬ら仙と喰へば年中
邪気感冒ハ愁ひなのがるゑ
いハ俗ふ生姜祭といハ

十六日　堺神明祭　天王祭　木辻天王祭　波丹祭　大井大明神

桂川御祓　桂川ハ大堰川の末
流ゑ松の尾より
南ゑ桂川といハ伊勢の齋宮ゑ
立ゑハ皇女明十七日群行ゑハ
前桂川ゑ祓ゑあるゑ
ゑ次の野ゑ宮の別の処ふ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

十七日　不成就日　都京。諏訪祭。六条烏丸と鼎との間をいふ

野々宮別。伊勢大神宮へ齋宮ふる〜せる〜内親王三年の間野の宮ふこりの物いはしるいて勢州へ旅立る〜其ときに天子ろう〜櫛ろうて齋宮の頭ふるせる〜これと別るきの櫛といへ野の宮のこりれといへこりるせる〜野の宮とゑうれていへ行る〜とゑ〜ろう野の宮いふ倉山の辰巳る籔の内ふ古跡と残りこれも古い處と卜定あるそこりるこれ〜ゆ

いくこともさぶろうしゆゑ野の宮の古跡豪々まあり齋宮のこゝい後鳥羽院の御宇ま絶ろう

十七日　摂津穴綾祭　池田の民家の北山上ふあり綾

羽大明神と号す應神天皇此七年百濟より呉の国の絹織女四人とゑて織しめるひ〜今呉服といへ此呉の国の者れ始めそろうるゆゑろう又和訓ふろうる絹とはろうとゑい此あやとゑいふ綾を織る故ふ名づくるあやとろうの畧へ此地ふ祭ること應神天皇仁德天皇乃みやこの地ゆれそ

（寿）ろくふもゑ中むとゑ〜いれいろうあやろくいのこるろ〜れ　氏久

（能）采淡ふ水もいやこの星糸鬼貫糸ひよろうて元れ糸る考

十八日　今日遠く行く事といむ道ふてこ〜支えて元て志す処ふ至りと

十八日　摂津呉服祭　池田の田圃の中ふ祠あり

穴織の祠ふ隔つること十町ろう事実前ふいふことと祠あるいむ

うれ結をうる地あるゝや池田をそれその里ともいふ

十八日　大坂神五座祭　○今宮祭　やぶさめ祭

○天王寺廻廊立花。十七十八両日ゝ

○高津宮祭。夏祭六月十八日ゝ

十九日　京都　○南禅寺亀山院御忌　妙傳寺七面明神開帳

九日　今日齊戒沐浴して心を清くもれい吉事を得るなり

九日　山城城南神祭　祭る処七社一下の鳥羽中嶋壇上。塔森。石倉。竹田。小枝の土人産沙神ゝすむゝ鳥羽上皇乃離宮あるて是と城南の離宮やいひなれ城のゝるゝふあ比ゆへなるべし今い鳥羽帝とあるをまつるといふ

九日　波利女祭　高辻室町西ゝあり俗ふ繁昌

社といひて子孫のゝゝと祈るなり此社い婆利女なりそれと誤ゝ八ゝ与とゝ又それを云あやまりて繁昌ゝゝゝゝ

九日　京都旅夷祭　建仁寺門前ゝあり栄西国師勧請をる処ゝて旅行の海上ゝわたるゝ人い先ツ此社ふ参つて風波の難をゝゝん事といのゝゆふ旅ゑびすといふ一説十六日ゝもいふ

九日　山城八幡花頭　社僧弟子髪と剃つて衆ゝ加る　くい諸国祭礼記ふいでゝす面白ゝゝゝゝ

時草花と製ゝ酒宴催すゝ花の臺い六月の日と名ゝみてけり

おくり

能　花の比舞ゝて天満ふ来山

九日　今日杞柳の湯をゆあみもれハ無病長命ゝゝといふ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

九一日　京○天道社祭。五条坊門楷熊有都○栢社祭。灰方の南林の内に有

九一日　大坂上難波祭　俗に稲荷祭といふ博労町あり

本社は仁徳天皇を祭り稲荷は地神にして本社のかたわらに鎮す六月の御拔神輿御旅(渡御甚賑)今日は秋祭にて神馬の渡りあり

九一日　江○根津權現祭。隔年ふあり　戸祭神委しく博物筌に出せり

九一日　山城淀祭　小橋の辺にあり淀姫神といふ傍に千観法師の宮あり又一座伊勢御門神祠といふありて納所楊枝島小橋の東河中にあり之れを摂社と合淀姫の説まちまちあり又小橋の北に大荒木社とあり同日神事と寺又水無瀬に淀姫明神と云あり廿三日に神事ありいづれも是なるべしか

九二日　大坂座摩祭　摂州西成郡の惣社といふ今日の祭と相撲八十島祭といふ口傳に六月廿二日御拔の時神輿御渡御

九四日　河内○植松村逆様祭。廿四日と祭礼として廿五日と霄宮寺

九四日　江逆神祭　大津相坂関清水大明神蟬丸の宮と称す此外古歌に詠する関の清水の旧跡あるよしに傳へて此宮のある外と今は清水町と称も此宮の別當と近松寺と別して諸国説経者の本地くむりに浄るて説経と以て世をなる者此寺の免状をうけるよし説経者日暮小太夫の請る正徳二年乃免状とすのうけ見るまつの日は説経者来て神輿を供奉をなす例

九四日　山城木幡祭　むかしは今日あんも今は吾人辛メ医

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

十五日　不成就日　大坂天満流鏑馬の式あり

十六日　京都北山祭　洛北衣笠山世寅の林中にあり六所明神と云又北山天神祭と云ふ拜殿うて三番叟あり祭廿七日と云

十七日　大坂津村祭　○津村御夷祭。鎌倉権五郎景政の夷を祭る故に五郎の社ともいふ中世より中央天照太神左に八幡宮右に鎌倉権五郎都合三座あり

十八日　京都鳴滝祭　△福王神祭。福王子社鳴滝社を合祭るといふ福王子は初め歩荒神と云ふ福王子と轉化せしと云説あり神体は光孝天皇の皇后班子を祝ひまつるとぞ京俗これを五器あしひまつりといふとぞ

○東山大谷報恩講　廿七日廿八日迄

○醒井荒神祭○油小路火の尊祭

十八日　天王寺　○天王寺新講・音楽あり坂○梅日石の鳥居神送り

十九日　小雨降り廿九日まで○今日風雨あり水難あり○今日能々身を慎む

○今日は夢窓国師忌天龍寺・相国寺等持院等にて執行あり

十九日　摂州住吉神送　摂州住吉にて今日玉出嶋御祓の神事行はるゝ神祕あり神送りといふ事社記に見えず十月と神無月とにて神々出雲にあつまりあるゆゑ俗説にいふて今日の神事と称ふ神送りとあるべし神無月のことゆゑ委しく十月の部並に日本歳時記にくはしくもとめふこんと略す

中己午　周防山口祭　吉敷郡山口にあり祭神住吉三社

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

月令

九月一ヶ月中ハ頭ゝ雑事景物を出ス

伊勢御遷宮 内外両宮を のわく振社

くも二十一年を歴まぼかるゝ造営あるゆゑ九月をもつゝ御遷宮の月とさまる

番船 △綿番△取綿。追綿 浪花すて當年の新綿と一時ハ菱垣船ハ積込し出船の吉日を定め纜と解く前後の番と鳳と取て定を同日ハ出帆と江戸着岸の前後を手少しにても早く着岸すると手柄ゝ出帆の見送餞別ハ船ハて種々祝ひと送ゝ浪花を綿船迫世い十月ハ出帆ゝる追綿とゝ綿船出帆後ゝ出る新綿を積む船と云

ゝ追綿番ゝも追綿船ゝ

ゝなりゝゝ十月の季ゝ

ゝそゝ可ゝゝ

排 番船や社仏を荒紀あり鬼貫

ゝ舟の出て日数もあるまゝ午川

番船やゝゝ船ゝも化ゝ平刀

落水 。せゝ落を水ゝ

助の実のゝゝ九い田ハ

ゝゝ水を切ゝ事ゝ

ゝゝい稲ゝゝのゝゝ

排 ゝ水巻表一ゝ社ゝ宗因

一秋を一月仕業れゝゝ茶畫

海嬴廻 海螺のゝゝ糸を巻

席の上に廻ゝ打出

ゝと勝ゝ手児童の戯ゝ 三月国

日並記事ハい九月九日ハ限る事

ゝゝゝゝゝゝ児童の遊ハゝ

秋冷の節ゝ冬ゝゝゝ

新綿 此頃新ゝ綿吹出て

賣買ゝる故季ゝん

哥ふい新綿の支い議と新綿
くろかて真綿のくろえ七月十六日
の処委　俳ふい新綿と訓して読
くろかい七月十六日の季ふ新綿と
訓ていふくろきい木綿のくろく
(俳)もん孫や白菜ふ新綿くろかる　故栖

時令

此部ふい九月時節ふ
ろくろ夏霜杯の支を出す

暮秋　△秋の湊　△冬と待　△冬
ちろて　△冬と隣　こいぐ
も九月中頃ろう晩日ものの夏と
ろ凝次の詞のもと　△卯　あるい
俳の季ふ用ゆくろう哥ふも秋
の名残おーまくて心と多くろう
(哥)家集　秋の湊　正徴
ろくろくもも秋の湊の川ろくれ
ふくろくもしくろ秋の系ふ
正治百首　人生の秋　慈鎮
人生の秋杯ふ月いかくふもて
あしふ逢ふ有明乃月

後拾遺　秋を惜　範永
あととろていくくけるや像をりん
ろろ月秋をわーむ後ろ
夫木　前中納言定家
(哥)ひとふ逢ふ後の夢も秋ふて
嵐ろくれて松むーの夢
金葉　中原経則
あすとろ逢ふ夢の秋ろろの
やもろふのこ行くんをすろん
月　春秋虫　西行
秋ろくくとろろいむーの変ふくろ
こくく我くても秋くやいある
(詞)秋のかれくこ。秋のかくこ。秋の末秋。
秋の別強。考て秋。ろ月。後り月。
△秋ろくこ。△秋の記△秋を惜△ゆく
秋△秋ふ行く中、△秋考て△秋の別
△秋の名残△秋と考て△ひまくる妨
△移る秋△秋ふ後くこ　尾花い移ると
ろくく。霧い秋の移ると考てこあよ。
虫ふ移ると考ふ考ふこ。やれく

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

ふるう露ハ秋のかぜふかく霜ハ冬ちかしと
なり霜と露ハ秋の物ゝ。時雨ハ冬ちかしと
(俳) 初冬や大工のこゝろ日長き　杜国
ちりぬる木枯ゝ枯れ枯ゝ老ゆ嵐雪

(狂) 商人惜秋　柳牙

「あれ人も金引捨のまんまえ
よりはふむしの孫をやさくらん

(詩) 慕秋五字對句

望極閑山遠　菊枝花半在
秋深烟霧多　霜樹葉全稀

(詩) 全字對句　詩題

半山雲影前林雨　水痕収
十里風香晩稲花　山骨瘦

(詩) 季秋之詞　王維

瀧溪白石出　瀧溪ハ白石出テ水ガ澄ムト云フ
業稀紅葉　天寒紅葉稀ナリ
山路元無雨　山路ニハ元ヨリ雨ナシ
空翠濕人衣　空翠ハ人ノ衣ヲ濕ス

九月盡　九月晦日といふこゝろ古
哥ふかきく　九月の末
の年ゝきぶとみくるも今ハ九
月晦日ふかぎれり

(哥) 雨中九月尽　公任
いろ〳〵に秋のゝこりを我やとる
今ゝとゝまるこゝろ也やこゝろせよ

新古今　閏九月尽　大弐典
ゝ世のわ〳〵ゝとて惜まれ
秋ゝろ後の秋のかゝりを

(詞) 今ゝの秋。今ゝのこの秋。今ゝのい
ゝの秋。暁のゝひを惜ゝ。よもす
がら惜む。今ゝ金引。かゝのを
と秋もつゝゝとゝ。ゝろ〳〵

(連) 秋のふかさ木の葉ふる秋也　宗祇
秋ハ月さへ人あらんなぐさ　宗養

(能)やはらぎの明月は付合人多の秋貞徳
秋の景人のちりくむ奄二の郭　幸由

(狂)長月くれぬるも惜しく思ふそ
それてあすへ入たれそうそつき　天寛

野山錦　山嶽の郷木色付
とる者ーきをいろ
又草花いろく咲るとそいろ

(哥)後撰　読人不知
秋の野にすきのこもも見ゆるる
いろ〻に多い深しとそ思ふ

(能)移るとて秋を見しや秋の山と由
紅葉ふも持くろ　庶そ多くの山　杜鵑

秋霜　霜冬に暮秋ふ潮置初る
ゆく秋の霜秋の霜なく式

(能)秋の霜殺んさるに踏すを　道二

(詩)秋霜五字對句

江楼暮寒雨　鄰声菊店月
エテノタリ　タカ　ヲサムキ　ヒテ　クルクニ　ニ　ル　ニ　ヒ　ニ　ツキ

山郭冷秋霜　人跡板橋霜
ヤマ　ニ　ヒヤヤカニ　アキ　ノ　シモ　ヒト　ハ　マキ　ノ　ニ　ニ　ガ　ヒ　ヒ　ニ　フル

露霜　露は陰陽の氣なる
ものにて陽気勝て雨露と
なり陰気勝て霜雪となるなり
秋の末冷気つくるるれい露むを
んで霜となるなり

(哥)碧玉　後柏原院
露のもとやむらく秋ぶきうへて
秋と末拝のうゝ月の草

(謡業)鳥の鳴のさむきあさの秋風か
ちらふ　書かゝ　ぬきい

(能)秋来と根の月ぶやあれい思旅
つの影や秋の清士の人の寄き来来

露時雨　露ぶきまうて　雨を
そも袖も濡さいけも
雨時雨のやうに思ふゝゆへ露時雨と
いへ和哥かへはぬこ　あ　と　ふ
つまてろもよみこう

(哥)風雅　定家
ふるひてる花のうへこの秋ふいて
つもも時雨も　ふと　後とれこ

(附)清香の色つまや松の香の間の蓮二
月の色すくろ森れ小窓や寄くと北枝

露寒　秋の末かなりて露もむ
そんで霜くなるんと
ゆく此頃の露ゆさむく
故ゆさむしといろ

草木

此部ハ九月一ヶ月諸
のくさ木の類を考す

菊　文正忠菊譜ハ曰菊惟介烈高潔ハ
と百草と其盛
衰と同ぐ
ハ花開ハ蒼ととより凋むハ至る迄
九花と見る事四十日ゆ春苗と
生し夏盛ハ秋花と開き冬実
と結ぶ根と分て植るハ花葉質と
愛で実と植るハ千莖万朶一
幹でハ態色香域変ず実る
仙家の翫弄不老延年の異草
(異名)日精本草出○紫菊○文菊記上ハ雅出ハ
黄花月令出○秋菊異辞○甘菊事長文類
隱君子菊玉能菊○落英離騒○佳友
事物異出○月栄陸龜蒙出○延寿客○
籬客○隱逸花韵府

(和名)まくさ草△百夜草　星と草
形見草　よろひ草　藏王　千代見草　日
ちくさ草　かくよりハ　金草△松
草　秋ちく草　秋
の花△とくさ花　山ち草　長月花
いうで草　草のあるじ△花の射
△曹我菊△永和菊　たうれくさ
なきりのくさ　のこり草

(異)△花の方△才草ちくさ△ハ梅
い諸木ハ先ちきくい諸草と
ちくさ△ゆく名づく
△義和菊といふ黄菊の事とい
ふ　義和帝黄菊と愛し
たまひしゆくし永和菊と申奉る
いに明天皇の御事なり
○按ふ義和色といふ黄色とつくる
べし　西宮記ハ直衣の色ハ義和色と

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

[illegible]

(寄)寛平菊合　ゆうり草

[illegible]

藏玉　星見草

[illegible]

秘藏　かつらだ

[illegible]

藻塩　[illegible]草

[illegible]

篠目　[illegible]草

[illegible]

藻塩　[illegible]草

[illegible]

真傳　霜見草　北名は古今集[illegible]

[illegible]

藻塩　いなて草

長月の九月ふるといふなを

[illegible]

○秋無[illegible]

[illegible]

藻塩　秋ちくれ花　一説に秋ちくれ

[illegible]

○[illegible]我菊　[illegible]

[illegible]

(寄)新勅撰　月前菊　右大臣

[illegible]

後拾遺　詠宮庭菊　長房

[illegible]

家集　菊開中友　行宗

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

紫のうへも秋すくゆひ　新古今

さく　花の色の変るなり

詞　ふるのさこへ。秋の草葉。ようれの
きく。菊紅葉。ちくさの花。全葉。
八重かさねる花。重かさなる。
菊の色。ふるねの菊。菊の名所。
横に吹上の浜。紀伊の国。
の浜。池に多くの新庵ふるゐ。
古沢の水下水に菊の下水。花の
下水。老とせく。千世ぬきしる。
ちそくらひをのる。千年の秋
うつと。露に雪のまれる白ふ。
雪のまれくふる。白ひを重る。
祝に千年ふるひをのる。千世。
幾秋。かさうをとうひ。露に雪
に菊ふ秋文孫ありさまくとうり。
をとあまる。打絶ぬる霜に色の
かるとーと続り。うろふきくの
こむ　されも　ぬきはをぬる　ぬき。
○九月九日に九ふとさかりうるふ入

九月九日の九ふ十日よりに移菊
ふるといふ九月九。移菊の
と哥ふ秋の末又冬のそめ
ふもよりあり。いろうろふ入おく
などむをふ意

連　菊さけいろいろうろふ　宗祇
ものこ表紙ものきくれかうしふ　肖柏

俳　庭をうつるる菊の香ふ　芭蕉
菊白菊をふの花ふるる　嵐雪
菊所ふ小刀の再や菊合　支考
菊の菊所ふくふも菊ふ　越人
菊ふ花ふ菊のつゆしふ　移竹
菊の香ふ花も清水　樗良

狂　菊の花あるれをふかくれと
はくぬ　ふるうて　貞徳
うるくと　枝ふをうて大ふ
菊ふを　千山
菊ふ　菊ふ　千山
内ふ花の枝とつをく　貞室

詩　菊五字對句

露凝千片玉　曲池潔寒流

イケノメクリタルニヲケルキヨクナガレカキレイニミエル

菊散一叢金　芳菊尋金蕊

詩　全七字對句　詩健

植處清香依玉砌　青玉潤

キクヲウエタアタリハキヨキニホヒガキレイナニハニアツル　キクハ青イ玉ノヤウニタツヤウナ

摘来泛蕊滿金樽　碎金香

スイキニカウバシ　サイキン

詩　白菊詞　魏舒

濃露繁霜着似無　幾多光彩照庭除

ツユモフカイレモ、白キクニ　オイテハイロカナク　ツイテ　ツユモフカ　ツイテ　ツイテ　ツイテ　ツイテ

コノキクハイカホドノ花ノ色ヤニカリガアルノデコノニハデテラスヤウニウルハレウミ元日ヨ

何須更着蠟兼雪便好叢

邀夜讀書ヤヨキヲアツメルニ及ハヌ

コノ菊ノハナノ白イ色デヨルモ書モヨミラレル

菊合　殿上人の御遊とそいふへき度々あり和哥を詠とも平城天皇大同二年九月幸神泉苑四位已上共挾菊花昌泰三年詔侍臣菊花献千樣八月左右番鬪色香而擇其尤者裁之殿庭

菊花香　こゝを炷く　香なり

妙術の方　黄菊を茯苓と松散くこれを服すれハ長壽を

仙薬の方　菊の莖葉ともに黍米のごとくの如くの長命

菊品類　猩々菊　紅色　小猩々　白　白大輪　白小輪　醉楊妃

白中　楊貴妃　白色　いろ小輪　金目

黄　黄色　銀目　黄　白小輪　銅目黄

大般若　白八重　黄大輪　黄大般

大般　薄色千重大輪　ちつ仕

かさうろい 旧称 小紫 ○紫ひとしほ
かも紫 ○紫ひとしほ 鳳凰 黄いろ
きちんも云 兩面 ○ひとしほ 伏見
常盤 白ー ○紫小さん花のくくふくも 黄常
盤 千重黄 桐壺 ○さくら中 千重 有明
白千重 ○ひとしほ 櫻菊 ○ひとしほ 銀
総 白中ちん ○れさく 三川咲分 黄ーろ咲
仙臺咲 ○ちんちん ○ちんちん 唐車 いろ
大ちん花形 ○ちんちん 天人 ○ちんちん
二重 黄色 天下 天人ふ似ちり 初恋 乱
猩々 ○ちんちん ○ちんちん 一重猩々 ○ちんちん
石山 ○ちんちん 大朱 ○ちんちん
郭公 ○ちんちん 三井寺 ○ちんちん
黄咲 末摘 半ひらきもていふ
ちふる ○ちんちん ○ちんちん

○此外△白菊△黄菊△万菊△大菊△小菊等数百品あり ○菊品しなる本ふくーきいく爰ふ畧と右菊品としなる本い花形大圖にして分毫もたがはず ○ふーて堂上方の御哥をくり又且い菊の植ゆう花の咲しーゆうもで委ーく記と

地榆花

害木香○吾亦紅。葉藤よ似て花千月紅 俳 吾亦紅 ○ふ紅 ○ふ紅 ○ふ

△岩菊花　花黄ニ一名小多くあり
ようり咲きて泡の如く
なれば一名泡菊とも云立花の人
さ留まん用ひては一ぎとめ類
葉い表青く背白し
(俳)泡菊の名を名ぶ匠　許八

△蘆穂絮　二百余年前永禄年
中まで木綿い日本へ
織と渡さず夫故真綿の外ふ綿
と云物は勿論木綿も也布ふ穂
絮と入て下賤の者い布子とて
着てりくらて今も江戸なそ
中入綿と云ホウレイ綿と云穂入綿の
轉化せし蒲團も蒲の穂と同
て造故の名へ今も大坂なそ木
綿と織と布と出ると云い右の歌へ
(ろ)それもみるべ名へ母のもとへい
ろろあしれ花もうらも　光俊卿
(俳)子ゆえ浦島小海女の袖穂宗鑑
右歌俳い故事と含てりり名詩

△穂絮故事　孔門ノ閔子騫と
云人母先タテラレシ
カバ父後妻ヲムカヘラレシニ閔子騫
至テ孝行ナリシカド継母ハ二人の
我子ヲ愛シ継子ノ閔子騫ヲ深
クニクメル餘リ我子ニハ真綿ノ入ル衣
服ヲ着セ兄ノ子騫ニハ芦ノ穂ノ入
タル衣服ヲ着タリ父コレヲ聞て後
妻ヲ去ラントイハレケレバ子騫
レヲトヾメテイハク母在セバ一子寒
ク母去ルトキハ三子ヒニ寒シ云テ
母ヲ去ラレンヲ止メ玉ヘト父ヲ諫メ侍
△蘆花散　△枯尾花　枯尾
花し云い枯る薄へ花の穂
が獣の尾ふ似る故尾花と云へ
(ろ)続千載我仲忠おて七月や
末世の尾花うし枯るあり
(俳)蜘さの果、尾花の秋ちく素堂

△椿實　本字海石榴和名抄ニ出
皮さひき仁を取ておりて油

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

と取く○千樹説に畿内又は江東の方
言に椿と木の実と云しいくり

橘子　異名　洞庭佳味　韵府　黄金丸　霜朱　木奴　奉物　遺母　吳志

○橘の説とるゝ多し先家樹
うりと定むべし　本艸註二三才圖會に出

橘の子として季節用ることは橘又は
盧橘として哥連俳ともに夏寸

密柑　紀州有田肥後八代を家上とす

俳　ひなの狩そのもやまを吹蕪
受あはれとく〻と今の密柑　家鑑

柑子　橘の後に渡る物へ。事物語その石のうるはしき
かるる水い小柑子ムりの巻ゑさ
ゝとこゝれかり○又謡曲の遍小
町ち文に大小柑子金柑とゝ
へり京摂の俗年始に庭ゝい小
柑子ゝ密柑ふまじ〻賣るのい大柑
子ゝ密柑い皮麁く柑子い皮細

乳橘　俗九年母と呼　俳　九年
母やとろゝ甘さ風の名替

金柑　金橘ゝ云　俳　金柑や
ゝ　ゝ上り猫路静

○密柑。九年母。金柑の説
真淵の説い小柑子い金柑ゝん
大柑子い密柑ゝるべしとい
製沖の説い小柑子密柑大
柑子九年母ゝるべしとい
ゝ是ゝるや

温州橘　其葉密柑に似て薄く
ふゝ其実形密柑に似
ゝ温州い漢土の地名ゝ此外産
る橘い諸州にもゝとてあり
美ゝるゆへに温州橘と
名ばかりて名だかし

佛手柑　実の形人の手の如
指あり故に佛手
柑と云味よからず香気いと
背日本にみし近世ゝ作り

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

枳殼　人家垣に植る（俗）かゝ之い
やそこ多とこゝ云　本草

楓樹　こゝ元の蟹名こ其実初め
生ずる時毛あり　熟すれ
ハ毛なし　信州ふい尤多し

（俗）後会の釈迦こ楓樹この多色蕉

南天燭子　実い赤小豆の如く数十
一かたまりにてあり

黐子桐實　天竺桂の実あさ
ごの木と云りのへ
蟬か制する物くやぶ鬼桂も云

（俗）たりの実やしいたゞ　右さ愚乙由

皂角子　（和名）皂莢　西海子。
大木あり莢い棚か似
ゝり　実いさゝ豆のぶゝくさゝと
垂る、長さ尺余ふも及ぶ　夏黄
白の花をひゝを

（俗）さいしの名ゝ紐ゝれそあり　夏

木槿子　莢い藤のごと　俗ふ実
とゞゝ云へ是と合

珠か俗る少く　一名菩提樹ゝも云
ゝるべし　此実のゝふて　衣と
あゝえい甚能あり

（俗）むくろの芝と拵て作る衣い麻文

菩提樹　枝莢共ふ楮か似ゝり　本草
又一名い無患子　莢い冬
青か似てや　尖長し　実い桃ゝ
似ゝり　念珠か作る　俗ふ鬼思想と
名づく　註形気とくゝと云　松浦花鏡
今い京永観堂もありとそ

川楝子　俗ふ花と楝こいへ
真の楝檀とい大か異
ゝり　実と金鈴子と云　形状ふよ
ゝて　その名へ　苦種ふ苦楝と云

（俗）その名ゝ金鈴子ゝ似ゝり　杜国
ゝ云へ　苦ゝて　於ゝる果ゝ　百州

桐油實　実九ゝ大ゝ　油ふ多
ゝ　或い漆ふかへて

用ゆゝ法あり　其功荏油ふ似ゝり
本艸　黐子桐　虎子桐と云　是へ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

椋實　木は榎の木に似て本は一種叢生するべし実も又同じ熟して黑く味甘し小鳥好んでこれを食ふ葉は物を磨き幹は杖とす珠とし戴盤樹盤とし念珠にも作るべし用となす

俳　椋の実は多し小豆も大木なり

槇檀實　高木なり花は瓜に似て実は檀樹に似て

俳　かりがねのなくこゑ千代

栩實　又柞とも呼但種類あり実と結ぶものは栩

此実の名と像とかきて和名つくなこへ黑色と深る物へ椋半とつくりて栗より大きく葉の大なるは七八すぢなりて栗の同種異物なり　遠国山家これと麺とす

ふ棒をそうち延と手元の迄

きりの故世の諺ふトチメン棒とうると急うることのたとへ

俳　栗は八月手に似たり

山茶　山ふかき家せうろ水をえん

うつ〻義るとう拾ふ　西行

俳　とうけ実や一字と蔓三尺経　其角

光蕚草實　実熟して赤し四時葉凋まず故に万年青の名あり唐に嘉祝ふ用ふ花鏡に見えたり

俳　はしりくやいを荻にのかりこの千代

ふ物ふ月やこんにちの実　史方

栗子　異名　河東飯　天台道　果事物異名　砂糖船来せる

先は栗子は果菓の最上なり漢土にもこれを貴ぶし見えて唐の李商隱ゲ雜纂ふ富貴の魅と云し栗の皮と出せり千て日ふて搗粗皮と取るを搗栗と云

盤そ打る打栗と云

(ゑ)ことそらして木ぬすびとの栗
いろいのごとき秋やなやらん　爲頭

(俳)笑ひかちくて栗の秋霧由平
いら栗ぬすびとの為にうるあ為ら嵐雪
ぬすびとの栗の侍るか芭蕉

(詩)栗五字對句

同上

刺如蝟患　朱夏滋采日
ハリネズミノヤウニ栗ノ毛ヲ逆ハスル　ナツノハタンノ　シゲル

雙眼似冷歡　清秋結実時
ダブタツノ眼ニテハナカカ　アキニアツテハミノムスブ
ヨウニ冷ヤカナル　トキニナル

球栗

栗いがのそと又重なりの
あるがいろ是といがくいふ

落栗

木ふるゝ時をくいがくりげ
てなのつゝ地ふ落るをいふ

栃栗

栃栗○指の頭をとり
小さき栗をり木も小さく
断く二三

菊栗

栃栗と称る
ト串をり

蒙栗

栗の下も枝ふの為すゝ　望翠
愛栗や芝のをりにやとりつき　其角

栗子餅

栗を粉とする
餅ふまぶしる物へ

錐栗

形長し錐のごとく
尖るをり本草時珍說へ

三度栗

山栗にて少し年ふ三度
実のるゝ上野の山中ふ多し

榛子

榛栗○得眼○葉ふ皺
多し故ふハシバミといふ

いろいろ花の後ふ実を結ぶとる
し別ふ新枝の末ごとにかゝれ
ども葉ありて包む栗のごとく
生食をるふ甚美をり

櫟子

いちゐの実へ悉皆櫟ふ似て
分ちがたし　○光の外ふ毛
のごとき如きりのいちゐへカシフハ毛
の如きりのゑ　椎のごとく炒りて
食ふ又凶年ふハ粉ゝして食ふへ

(俳)そつうと少ふ櫟の実　李完

椎

落椎△椎いらふ○椎ハ実
の名をり木の名ふハあらず

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

故ふ椎とかうつひて実のこんるる木の名鐘諸こいつり

(俳)ふすとも椎ことさけ山ちる白州
笑のうへ二反椎の附羽ク郎　尚白

椎柴

△椎の葉△椎の小枝。
(三秋)△俗て椎。椎柴と云い
椎の木の柴ふなくくるる事椎い
至て小枝の多き物ゆへ山人の切り
て柴ふるへ併いまで柴ふせで
も椎柴とよる事もあり
俳ふ秋ふる哥ふい冬の題ふ詠り
△ふそは椎い椎の大るるう

(哥)後撰ワとなとい根ふさうえ笑窟
のとうるる山のしたいるふん
拾遺　笑窟のふるる山の椎はの
えくいとしもいろいかりし

團栗

(俳)ふえくふ
榔の実ふり
称宜の眼ふる寸養子ふ鬼貫

新胡桃

核果○陳倉巨宝
一種山ふる鬼ふる
△しいふい上ふへひあるとと云い此中ふ
ふりて甚皮薄くて破やすし
○唐ふい白胡桃といふるるの
ありるや李白の詩あり
紅羅袖裏分明見白玉盤
中看郤無疑見老僧休念
誦腕前推下水晶珠赤キウス
ニアリテハアキラカニ見ユトモ白キ玉
ノウツハニアリテハ見ワカラズドウヤラ
老ソウガスイレヤウノヒユスラツニグレヤウナ

新榧子

大木多ー木ふ牡と牡
とあり各花あれども
牡い実と結ぶこと牝い枝横ふ
なき牡い枝上へ起るう
(俳)榧のうこ書の山よ油絞紹鷗
ワるの実れ古も鼠ふくられ暢中

新松子

松ふこもいよ又松ふ
ぐりこも所ふうてうう
又松の実ふいふいつうき中ふあ
つふ長を仕こもいふうう

水木子

喬木に葉梅のごとく花藤のごとく黄也実も梅のごとく攢り生ず

(俳)火とりとそしらひ水木の身を浮世井蛙

茱萸

○山茱萸○食茱萸○呉茱萸○ゆき種類

香細く黄花開く秋紅色なる

(俳)張籠て嘉てくられし小祭　水音

瓢樹

(本名)蚊子樹　又イスノ木とも

いふ其実を蚊のやうなりと云

葉ふふきを出す物瓢簞のごとくく胡椒の粉の器なるにも用ひ

又吹けの笛の音あり此木にく火を除くに火を附け葉より

風と吹出して火と避く故庭砂の生垣ふまふるるより元火除木

といひしとヨケの中器といふ

(俳)ひえの垣ふまとてくと考ふる来山

榎實

胡椒の大きさにして味わ

まるそくるか

(俳)落る核の実ふたくさん秋の蕭

熟柿

△鳥柿○ゆきもちの柿

と干して薬にする物

柿は三秋の部に出せり

(俳)腸ふれのくるまるしる麦考

無花果

(古名)花なきもの

いふ俗ふ唐柿といふ

花なくして実のみ其実枝間ふ

あり状木饅頭のごとく

(本名)白英○一名鬼目と

鶴上戸

いふ但し白英は花ふつて

ての名なり鬼目の実といふ

又ツクミノイヒ子ともいふひよどり

好んで此実を喰ふ

(俳)ツクミノイヒ子ふ宗因

仙蓼

本名珊瑚菜とかく俗ふ

赤くて小さい実い

赤くて珊瑚珠のおもし小

さくて鮮やかなるを愛とべし

○枝の節蓼のごとし故ふ仙蓼と異名とす其の本邦にて実名とうれり又仙霊もかくへ

能 仙蓼の実紫なるものあり三惟

晩稲 △遅稲△晩田○いづて也 おそく実のる稲なり

能 稲のしべ花を出ん田うるる支考 杭風の一句いとゆゑ侯稲外文龍

漆子 △漆樹○漆なるて ぶも同詠なり汁い木 なりそ物をめるへ子ハ絞りて 蠟を仕て木ふ異種ありて 子し汁と取る別あり

能 木の枝ふ多ぬし漆子ハ宗因

紅葉 赤葉とも云 異名 △色見州 ○妻恋草○錦州 已上藪豆出

木の葉赤く又ハ黄ふなるとい紅イ元と注ぎそしてつとと 又此詞と体として紅葉て黄 変るもかく此ころ色づく葉い

○櫨○櫨○柿○白膠木○漆○蔦○柾○蒔○櫻○梅○合歓○ゆるき

ゆるの類

右の品々紅葉とつたへ九月の季

なり其内楓の紅葉い別して人 毎ふ賞する故紅葉と又い楓の

事くるる哥ふ楓ふかぎりん諸 木の葉の赤くなると紅葉と

いろり又紅葉とすくても。梢の

うき又い。おれ。濃。梢と

なりても紅葉のこと。

○楓○ひさぎ○そそ○まつ○ちら

等い七月の草木の部ふ委しく訳あり

哥 古今和歌集紅葉の哥へ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

夫木 △葛の紅葉

つたのこゑ野の中ふかち葛も
秋ゝなれいろうつりゆく

金葉 源師賢

ちくさにも枯やいろこはれつゝ
皆その原い紅葉しにけり

夫木 △蔦の紅葉 家隆

つたのこゑ荒るの紅葉にいろうつる
郭ふおくまうの山の多

新古今 △蘆紅葉

うつゝなるかくのふたるとも紅葉
ちらぬ中ふ秋風そふく

夫木 △柞の紅葉 頭昭

松ふかふ山ふ時雨のりぬん
岩下柞もうつるみちせり

仝 △まさこ紅葉 知家

人まれを紅葉しにけりみるちの
細川まさこいろ〳〵ふれん

詞 本の下もちち。本もれもしき。
きのちき。枝のもちい。うすくこれ

葉の色は。柿の紅葉。かゝ後。赤の下濃。柏のもちち。まさこ紅のもちち

△紅葉ふむ △下紅葉 △水の紅葉

△もみ〳〵ちる △ひゝ紅葉

△紅葉狩 山路よりもちをもつ紅葉
うりさ〳〵がりにけり

△川の紅葉 秋ふべ冬ふうる〳〵
は非うり。安家抄に出

△紅葉うれちゝ もちちのをこしづ
ちをいゝ

△紅葉燒 これい白乐天ゝ詩ゝ
いでまる詞ゝ

詩 林間燒酒焚紅葉 白樂天

△紅葉散 哥ふい暮秋ふうくゝ
うくていい初冬ふふふふ 俳の季 九
月ふも十月ふもまり △紅葉をふふ
ちゝ又△紅葉ふうれちゝ九月ふも
紅葉ちゝ十月ふふふ 紅葉ちゝ

△紅葉の土喜 是いを酒の盃
ふ紅葉していふふべ

△紅葉の賀 花の賀ふ紅葉
のふふ賀ふいふ

俳 紅葉ふ酒ふ浮ふ 紅葉ふ東巴

朝の霜ふせりきあるうる 梅里
義王のこ弥ごとの初ごゑ 嚢中
毋紀い桃の初咲 合真せを 貫玉
横紅系親さハ恭ゆ 蓼もあり 野明
屋内の乱れ桜よりうる紅葉時 鈔夕
蟬鳴ふおうても赤ー 椿紅葉 李坡
狂ふ〳〵ても残るさーーくる尾山
けおしさんくる余もべの紅葉 木端

詩 紅葉五字對句

林端散餘綺 似燒非因火
木杪絢殘霞 如花不待春

詩 仝七字對句 詩礎

紅霞迴遍吳江内 殘照晚
錦綺粧成蜀道中 斷霞秋

詩 紅葉詞 杜牧

遠上寒山石徑斜
白雲生処有人家
レラクモノ出レアタリニヒトノスムイヱガアルデカナアラフ
停車坐愛楓林晚
オモシロク思フハモミヂノハヤレノユフカタノケシキジヤ
霜葉紅於二月花
二月コロノ花ヨリモミゴトナ

尺牘 餽紅葉文

假山之楓光色欲然
折數枝以献尤右俱
恐散飛愛護為妙

尺牘 昏暮ヲ記ス 并ニ 註解

光色欲然 楓樹掩映爛熳
モミヂガイロ〳〵ニアリヤ〳〵ニ
○楓葉潤色紅韋々 ○霜
モミヂガイロツキヤ〳〵ニテヨホドミヨトニナリヤ〳〵ニ

楓糯色紫紅　折数枝以献左右

為折一枝献恍鑒○

荒庭幾枝聊致芳意○曲

圃隅囲之楓為折一朶當

風霜

野献

但恐散飛愛護為妙

艶妍不耐数日移竹筒厭

色かへぬ松　諸木秋ふかくて枯るゝ松のみ

色かへぬと賞せり

（詩）夫木

千載　藤原朝仲

色かへぬ松ぞ秋ふく風のあらしにちるはけそのあるかなくり

（俳）色も香もなくて松の色秋ふかくてもかはらぬ貞柳

（詩）全七字對句　詩題

濃霜満徑無紅葉　終待鶴

晩日高枝有白雲　未成龍

（詩）色不變松詞　無名氏

半依岩岫半是雲　岩ニヨリカヽリ半アンハクモノカヽル

孤立亭々昂歳寒　一ホンタチニタケ高クハエテ一事頗為清節累

素時曾作大夫官　コノ松ノヒトヅノクハクナニナシ　シンノ

ノトキニ大夫ノクハンヲサヅケラレタガニンゲンノ身ノウヘモコノヤウナ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

破芭蕉　秋風ふやぶれてうせし世のこころ

たとへて多し哥ふうり

俳　おもふ人の行くまゝや破芭蕉　鬼貫

狂　社頭ふるくそふ蕉ぬるるくとやれてうまの芭蕉うるはし　貞徳

千土生　千土田。稲孫。稲の刈田より再ひ生ずるを云古名あるゝおひもいろ

言　堀川百首

刈りてせいふ田のひつちいてそへて穂ふいふ

うら枯　蔓木のもつ葉ようの色つきかるゝを云

季　夫夫　家さかる小路の篠ずゝ枯て月吹ゝ入洗ちゝの音多

俳　ゝ枯の第ふかるちゝふ加翠ゝ枯やつきゝれ松の蔓もゝ桃溪

緑豆引　豆引。小豆引。実のうるを此頃ひくゝ

蓑翠川　俳ほゝもそゝ人て芋蔓も尾の声北鯉

草牡丹　紫衣菊。貴布祢菊　加賀菊。錦絡菊。

京ゝて貴布祢菊と云大和にて牡丹と云中国筋ゝて

シウメイ菊と云地国ふて加賀菊と云

佛甲草　俗ふ岩蓮花と云花ひゝさて実ゝ

小蓮花　岩蓮花ゝて葉細長ゝ

蒟蒻花　葉の長さ一尺ばかりにて天南星ふ似ゝ

ゝの月根を掘ゝ

櫧實　櫧ハ俗字えいいゝの実ふ大ふ似ゝ橡ハ食ゝし櫧ハ食ゝべゝたゝいちゝ

ハ毛ありかゝふハ毛なゝ

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用

梅嫌　子を結んで枯る（俳）梅もとれ　加生

種植　櫻麥○油菜○蕎麥○芥菜○紅花○蚕豆○水仙○春菜○大蒜○小麥○大麥

右の品々此月種とまくべし

移栽　牡丹○芍薬○竹○其外諸の果木此月うゑ

植てこと月令廣義に出こと尚又種まき柔果木うゑの仕方

諸菜此月取べき樣等まを委く日本歳時記九月の処に出す

草木用意　草木よく実をむまふ方

上十五日の内ふうゆれい実多く又菓初て熟とるとき酒手にてとるべし年々実多く

実のこざる木に実の手法のこれて穴をあけ実のる木とうゆへ

菓鳥のくハざる法　熟する時二三日と取べし鳥忽鳥をむ

此部に九月一ヶ月諸の生類を集めるす

尾越鴨　山を越てゆふゆふ朝夕なく間ふるゝ此とりに鳥ゝとぶにも隨分山のゆくさ尾をとりこうふ越ゆるゆへふ名づく其外説多く

（俳）尾でかふ鴨やをとがや芝居家　国芳

熊栗棚かく　熊ハ冬ハ穴ふ入蟄して春を待て出て木ふのぼり好んで栗を食ふ又枝を折るゝべ鋪て石巖枯木の中ふ設く是を熊の架と云

（句）白雪のふる木ぬるれ栖こそ　為家

大ふの熊のそこるゝ為家

（俳）棚こかく熊を公ハ虎ふ　其雪

霜踏鹿　霜ふれい尾ふ九ふ

（句）ゆゑ鹿の　ゆゑ鹿の　ゆゑ鹿の　定家

（俳）秋ふ霜ふ鹿の弦ハ　乙由

あの鹿ふ粥冷せそや鶴の羽南舎

狂 鶴ひとく羽ばたくを鶴ふ鳴鹿も
ものいふこと　さくらはなの　百丈

詩 遠島酉能讃字題　後鳥羽院

都門路峠今誰問　ミヤコヂカクモこナ
ガカタヨツテアルユヘ　霜上獨望
今ハタレモハヌ

麋鹿蹤　シモノフウタウハヲヒトリヒロタセヤカノ足アトガアル

紅葉鮒　○鮒の此頃鰭紅く成
うるとゝへ西近江堅
田浦又い舟木浦をとり多出る

俳 名月の夜や浪ふ洗ふ紅葉鮒　伯光

豺祭獣　俳 豺の祭りとさうる
や象り鄉子　李由

爵入大水為蛤　俳 武景と
ちゝ化売
ゝゝ　文素

右両條とも註ハ口の二丁メ月令の祭出

細代打　延喜式ニ日山城の宇治
近江の田上氷魚の網

代各一疋九月ふ始まり十二月
三十日ふ至りてこれを貢ると見
えたり今ゝ細代木とろ事
九月九日よりそどもろよりあり
あーろ木を打てこゝ川の早瀬ふ
度付の杭と上廣く下狹く左右
ふすゝく打て其下の狹き処ふ細
代守の床とかこ簀火をたき川水
のそゝ杭の中ふせゝれ入ふつきてゝの
床の簀の上へよりゝる氷魚を取
ゝりとゝゝ　加茂真淵が百首
古説ゝ見えたり

① 名所い。宇知川。田上川。近江
の湖ゝ野川をゝ哥ゝよりゝ
氷魚　和名抄ニ曰鱁　白き小魚ゝ

旁 大木ひとのゝるあゝとゝ尾ゝと
田上川やあゝろゝゝゝ　春雨百人一

俳 朝日山更ふ弘ゝり細代打　嵐雪

必用

此部ハ九月一ヶ月天気占候
養生等要用の事を記す

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

方角。家普請他行南方とよ寺北方ハ大凶之

破軍向方

夜九ツ子ノ方	夜八ツ丑ノ方	夜七ツ寅ノ方
朝六ツ卯ノ方	朝五ツ辰ノ方	昼四ツ巳ノ方
昼九ツ午ノ方	昼八ツ未ノ方	昼七ツ申ノ方
暮六ツ酉ノ方	夜五ツ戌ノ方	夜四ツ亥ノ方

日刻。○酉日戌ノ日。酉刻戌ノ刻。事とる事ハ用ゆべからず

樂事 此頃やゝ秋冷えて木々の葉ぞへも色づき野の気色い小萩露草その咲初るよりて浅茅もいろばきそゝれも穂ハ出て屋花ゝ夜いとゞくの虫の音ぞ増さん露もやゝ寒くなるまぞゝかなくきゝつゝかゝる秋の夢のあいまいひつゝ

生花式正 ○菊。川芎。紅葉

○鶏上戸。○ちゝぐさ。○栗。○南天。○芦。○岩菊。○山ひらゝ

衣服式 朝日より八日まで袷と着て九日より綿入と着る袴ハひゝ色ゝ。女衣服も是ハ同し模様ハ心ハ隨ふべし

紅葉衣 表ちゝ裏黄ゝ 一説表黄裏ちゝ

櫨紅葉衣 表ちゝ裏黄ゝ

養生 此月陰旺陽衰ハ當ハ精を固し神を斂むべし補養の薬を用ひて気を養ふべし座卧西南ハ向ふて上又野外ハあるゝて血脉を養ふべし風寒ハ感ずやすゝ時を考へてつゝしむへし月の末ハ至り味の甘き物をとるべきて辛く又酸なき物を腎気を補ひ委しくハ延壽養生論ハ出そ

蜜柑を夏まで貯ふる法　杉の箱のうちふ竹とるを然してつるるをよくして下家穴ぐふ入おくべし

佛所ざこ年中貯ふる法　あてしき樽を置このまわりを漆をよくぬり蟲ふ入ふることよくして物

飲食

九月一ヶ月食物の類とあろ先出を

新蕎麥（俳）新蕎麥や客も絵に見る心地可由

△蕎麥と麻ゆ胡麻ゆ玄坡

柚味噌（俳）むらオナ名陽明家へ

△柚金。柚干

清酒や柚こそふけて猪の上　オ広

どち餅　栩の実を搗き漫ー粉くるーて團子ーす

△

蒲萄酒　世俗の和制ころ物を好酒ふぶどうと浸ー置てもれとのめり漢土の制ハ異ちるべー

九月飲食幷料理献立

禁物　生姜　八九月多く食へを春ふ至ってを眼を病む毒を損ー筋力を減らす妊婦これを食へい生ろ子六指をしむ

○冬瓜　今月食へい反胃を病む霜ふうて後食べー　孫真人の説え

好物　雉肉　九月より十一月まで食べー稍補あり他月ハ宜しず

料理

汁

鯉	葉付ぐ
鯉	葉付ぐ
鯉	葉付ぐ

あのうなぎ
あらあら
まんぷく
きをご・あかい
ゆのこ
あまもこ・さとう
おろし・たろん・ゆ
ぶり・こうくひ
たろん・ちゃうが
ゆ
あるびん・たろん
和まつが・ろう
おそしたん

清汁　さけのこまま

ひきなまぐろ
三つ葉
こしやう
きんこ
れんこんのちく
こしやう
たつのこ
ちり酒

差味　さざえ小口切
くるげ・こんを
えんぐま
きのこ・くげ
酒まのり
ぶらいこ・づけ
れんこん・たて
ゆ・ぐつゆ
たこ・かざこ
ちろ・ちけ
いり酒
いりこ・ひしこ・こまつ
かこ・かこし
あるびん・たい
くるん
ちりこ

煮物　ひらめ鯛
たまご
きんこ・ごぼう
漬ちゆ
ま豆・まんじゅ
小ぶり・うぜ
鯛・やきぐろ
たまご

和會物　かまぼこ
まくなし
くるま
くしこ貝細切
ちくろ・ろぐ
むこまきあん

干いか・ごま
酒ごま
そまあん
松茸
あくなし
ぐるまこ
ぐるまあん

まのこ・ろくま
ぐるへき
ぐるごま
ぐるまこ
ぐるまこ・ぎう
くるぐ・ま・し
ぐるぐ・ま

吸物　ちくびり
ぐるぐ
ぐるぐ
ぐるぐ

特1
2961

差味

煮物

和會物

吸物

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961
ガラス使用

国立国会図書館　タイトル『月令博物筌 16巻』 請求記号 特1-2961

ガラス使用